

極地研 NEWS

no. **190**
Jun.2009

CONTENTS

極地研TOPICS 02

2008年の
昭和基地越冬活動を終えて

「オーロラ オーストラリス」
による夏期オペレーション

国際極年(IPY)
2007-2008を終わって

国際極年ジュニア・サミット

ワークショップ 06

南極条約締結50周年記念協議国会議報告

2009年北極科学サミット週間参加報告

ユネスコー北極の持続的発展に関する
専門家会合(モナコ)

観測隊だより 07

昭和基地から

第51次南極地域観測隊の
冬期総合訓練を実施

極地研カレンダー

お知らせ 08

人事異動

広報室から

近刊紹介

総合研究大学院大学・
極域科学専攻コーナー

 **国立極地研究所**

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構



定着氷に突入するオーロラオーストラリス

発行日/平成21年6月15日

編集発行/大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立極地研究所
〒190-8518 東京都立川市緑町10-3 電話:042-512-0655 FAX:042-528-3105
ホームページ:<http://www.nipr.ac.jp/>

2008年の昭和基地越冬活動を終えて

牛尾収輝

第49次日本南極地域観測隊 越冬隊長
気水圏研究グループ、南極観測センター・准教授



はじめに

第49次隊は南極地域観測第Ⅶ期4ヵ年計画の2年次を、また国際極年2007-2008の後半をも担った。南極行動は一昨年的人员・物資輸送に始まり、第48次隊から昭和基地を引継いで、最終航海の「しらせ」を見送ると、基地は越冬隊29名（観測11、設営17、隊長1）のみとなった。近年では少人数ながら、50項目以上にわたる定常・研究観測、それらの支援と基地維持のための設営作業に本年1月まで取り組んだ。

越冬の経過と成果

2008年の昭和基地の冬は寒く、年平均気温（-11.5℃）は歴代5位の低さであった。6月初めに-30℃以下の日が続き、北の水平線に沈んでいた太陽が蜃気楼で現れ、極夜の基地に眩しい光が射しこんだ。年

間26回のブリザードは平年並みだが、春・夏も度重なる吹雪のため、夏作業に備えた除雪には難渋した。基地周りの海氷上も雪が多く、パドルは発達せず、リュツォ・ホルム湾全域でも安定した氷状であった。

基地観測では、二酸化炭素・メタン濃度の上昇やエアロゾル組成の詳細、中間圏界面領域の温度変動を捉えた他、酸素濃度の連続観測や無人航空機の長距離飛行に成功するなど、多数の成果を得た。今後の幅広い共同研究の発展が期待される。設営作業は日々の業務に加え、風力発電や野菜栽培装置の稼働など多岐にわたった。みずほ旅行前は、荒天で車両整備に遅れが生じたが、旅行中のトラブルもなく、計画通り帰還できた。また、第51次隊以降の新輸送システムを想定したコンテナ櫃の走行試験も行った。

宿泊を伴う野外行動は計26回（112日）におよんだ。旅行メンバーには、経験の有無や行動技術の差がある。しかし、誰もが危険にさらされていることを認識し、訓練と反省を入念に行い、安全対策上の情報も全員で共有した。

今を伝え、歴史も学ぶ

地球環境研究をはじめ、フィールドサイエンスを展開する場として昭和基地が果たす役割は、国際的にも強まるであろう。基地維持と観測継続の重みを改めて実感し、半世紀を超える南極観測に貢献された先輩方に敬意を表する。高度な技術に支えられた現場であるが、手付かずの自然に溢れ、厳しい環境と制約の下で活動が営まれていることに変わりはない。従って、研究者や技術者にとって、南極は探究心、挑戦する意欲を掻き立てる地であり続ける。その思いを、現状と共に広く伝えるべく、映像を活用した南極教室（40回）の他、取材や寄稿など情報発信を積極的に行った。また、歴史を学ぶ一環として、私達は樺太犬慰霊祭を執り行った。観測事業の初期に活躍した犬たちのことも、現在の私達が知り、語り継ぐことは南極の今を伝えることと同様に重要と感じる。

年末年始も私達29名だけで過ごし、次隊の第一便飛来を待った。1月後半のわずか2週間が、引継ぎと越冬交代に充てられた時間だった。越冬任務を遂行することができ、第50次小達隊長並びに隊員各位、オーストラリア南極局を含む全員の安全行動に感謝する。最後に、計画検討、観測隊編成など出発準備以来、2月24日の帰国までの間、数々の温かいご支援を賜った文部科学省はじめ、防衛省、隊員を派遣していただいた各機関、留守ご家族、国立極地研究所ほかの皆様方に厚く御礼申し上げる。



蜃気楼で現れた極夜の太陽（2008年6月2日）。



樺太犬慰霊祭を天測点で行った（2008年12月22日）。



正月も29名のみで過ごした。

「オーロラ オーストラリス」による 夏期オペレーション

小達恒夫

第50次日本南極地域観測隊 夏隊長
生物圏研究グループ・教授



はじめに

昭和基地方面で活動する第50次観測隊の夏期オペレーションは、オーストラリア南極局が用いている「オーロラ オーストラリス」を活用することとなった（極地研NEWS187号参照）。昭和基地への補給並びに越冬隊員の交代を、外国船を用いて行うのは、日本南極地域観測隊史上初めてのことであり不安なことも多かったが、この度、第49次越冬隊とともに無事帰国することが出来た。以下に行動の概要を報告する。

行動概要

第50次越冬隊28名、夏隊12名及び同行者1名は、平成20年12月28日、フリーマントル港で「オーロラ オーストラリス」に乗船した。日本から別便にて送った観測物資等を搭載し南極行動に備えた。出港前日にはオーストラリア南極局主催のレセプションが開催され、これから2ヵ月の共同作業のため親交を深めた（写真）。30日の出港後から各種観測を行いつつ、昭和基地を目指した。往路は、好天にも恵まれ、当初計画より2日早い1月13日に、昭和基地第一便を飛ばすことが出来た。ヘリコプター3機による夜遅くまでの飛行作業・荷受作業もあり、22日には第50次隊の物資輸送を終えることが出来た。輸送作業に見通しがたったことから、「オーロラ オーストラリス」は海水域での日豪共同海洋観測を行うため、一旦空輸拠点を離れた。この観測は、東京海洋大学「海鷹丸」と連携したもので、「海鷹丸」が開放水面において、「オーロラ オーストラリス」が海水域で同じ観測を行った。一方、昭和基地における設営計画では、新「しらせ」就航に伴う輸送システムの整備として、道路整備工事、ヘリポート待機小屋建設等を実施した。

第50次隊の物資輸送及び海水域での海



フリーマントルで開催されたレセプションでの集合写真。

洋観測を、順調に終了させることが出来たことで油断したわけではないが、海洋観測が終了した25日以降は悪天候が続き、飛行作業は待機、順延を繰り返した。27日には1月として10年ぶりのブリザードが認定され、最大瞬間風速41.2m/sを記録した。また、26日～27日及び28日には外出注意令が発令され、屋外での活動に支障をきたした。南極という厳しい環境の下では、思い通りに計画を実施できないことを痛感した。

ようやく天候が回復した2月2日、第49次越冬隊員（29名）と第50次夏隊員・豪スタッフらを受容し、復路航海の途につくことが出来た。3日には氷海を離脱し、各種観測を再開した。昭和基地離脱が当初計画より3日遅れたことで、復路の観測計画の実施が危ぶまれたが、「オーロラ オーストラリス」は全速力で東航し、15日には当初計画通り東経150度線の北上を開始した。19日までに全ての観測を終了

させ、20日にはホバート港へ帰港することが出来た。

おわりに

今回の行動は、必ずしも順調に推移したとは言えないが、何ごとにも日豪一丸となって対処し、最終的にはほぼ計画通りに作業を終了することが出来た。これは随所で幸運に恵まれたためであり、皆様のご声援の賜物と感謝いたします。また、第50次隊の準備段階からご支援、ご助言を頂いた南極地域観測統合推進本部、国立極地研究所に感謝するとともに、今回の日豪交流の経験をこれからの観測事業に生かして行きたいと思う次第である。

国際極年(IPY)2007-2008を終わって

山内 恭

IPY 合同運営委員会委員

国際企画室、極域データセンター、気水圏研究グループ・教授



遅いスタート

2009年3月1日、由緒ある国立科学博物館講堂で開催された「IPYジュニア・サミット」をもって日本でのIPY活動を締めくくった。ご存知のように、今回のIPYは125年前のIPYから数えて4回目にあたるが、2007年3月1日、日本学術会議講堂でのオープニングセレモニー「アジアとの連携」以来この2年間のIPYとは、いったい、何であったのだろうか。

南極観測が開始された50年前のIPY、即ち国際地球観測年 (IGY) に比べると、大きな事業が始められたわけでもなく、また国民的熱狂に迎えられたわけでもなかった。これは、極域の科学が既に成熟期を迎えており、定常的に様々な観測・研究が実施されている中で、今さらIPYと

いって何も新しいことはないではないかという世の中の認識を反映している。日本の南極・北極観測については、新しい予算的措置はほとんどなされなかったといっただろう。これは、国際的取り組みにもいえることである。IGYの時には、1950年頃から方向性の議論がされていたところ、今回の場合には5年前にもまだ形もなかった。これは、極域関係者が切に要望しても、元締めたる国際科学会議 (ICSU) などが重要性を認識せず、動き出すのが遅れたためと言われている。

今回の特徴

サイエンスとしては、実質的に多くの新しい、エキサイティングな観測が行われてきたといえよう (別稿参照)。特に、今回のIPYの特徴は生物圏が研究分野として取り上げられたことだろう。これまでの3回のIPYにはなかったことである。やはり生物圏が極域科学に、地球システムに無くてはならない重要な一要素であるとの認識が高まったためであろう。

「アウトリーチ」(教育、広報、社会貢献)が積極的に行われたのも今回の特徴だろう。国際的なIPY活動として様々な事業が行われたとともに、日本でもこれまでにな

く一生懸命行われた。5回にわたる「中高生南極北極オープンフォーラム」をはじめ、様々な企画が行われ、最後のジュニア・サミットもその流れである。地味な活動で、このひとつ一つが直ぐに極域研究につながるわけではないが、長い目で見たとき、今後50年後のIPYを見通したとき、あるいは将来の科学全体にとっても、重要な種まきになっていると期待される。同じような流れで、若手研究者育成の活動も行われた。これは、日本では国際南極大学 (IAI) のほかは、未だ余り動きが見られないが、国際的には「極域若手研究者協会 (APECS: Association of Polar Early Career Scientists)」を作って活発な動きが始まっている。日本からの関与も求められている。

成果の有効活用

IPYは、たった2年間の事業である。これでおしまいではもったいない。むしろ、この2年間にやっと立ち上がったという企画も多いだろう。この2年間のIPYで得られたものをいかに有効に活用し、遺産 (Legacy、これも今IPYで盛んになった言葉) として残していこうかということが、今、我々に求められている大きな課題である。その一つは、IPYで取得されたデータである。これをいかに収集・管理し、公開し、残していくかが、一つの正念場であろう。もう一つは、観測施設、観測ネットワーク、観測システムの持続的活用である。第1回のIPYでは環北極海観測ネットワークを創出しておきながら、途絶えてしまった。今、IPYで高められた国際協同観測システムの維持、管理、高度利用が求められる。

IPY終了にあたり、IPY 2007-2008、ICSU-WMO合同運営委員会でもとめた声明「極域研究の現況」に詳しい記述がある。ご参考願いたい。



IPY 開幕式典が行われたWMO本部ビル



IPY 開幕式典の会場の様子

国際極年ジュニア・サミット

伊藤 一

気水圏研究グループ・准教授



IPY終了にあたって

国際地球観測年（1957-58年）IGYの50年後に企画された国際極年IPY 2007-2008は、2009年3月1日に終了した。期間中には60を超える国の研究者が参加し、160余りの大規模な学際・共同研究を推進して、極域研究に飛躍的な進歩が記された。スイスのジュネーブ市の世界気象機関（WMO）で全体の観測期間完了祝賀会が開催され、それにあわせて参加各国でも、それぞれ独自の形態で祝賀行事が企画された。

今回の国際極年はIGYを含めて数えると第4回目になるが、今までの国際極年に比べて、際立った特徴の一つは、狭義の研究活動だけでなく、教育・アウトリーチにも焦点を当てたことにある。社会のサポート無くして、研究活動は展開できない。若年者の育成なくして、極域研究の後継者が確保できない、という観点に基づいている。また、3月1日に終了したのは公式の観測期間であって、極域研究がこれで終わるわけではない。研究活動は、将来へ向かって発展的に継続される。

ジュニア・サミット開催

国際極年の日本国内委員会は、上記に鑑み、国立極地研究所と共催で、「ジュニア・サミット」を祝賀行事として企画した。将来の、具体的には次回国際極年が開催されるであろう2057年を視野に入れた極域研究の展望について、青少年を中心にして討論する場を設けようという意図である。

プログラムの骨子

国際極年ジュニア・サミット—これから50年の南極・北極観測に望むこと—

開催日：2009年3月1日（日）13:00～16:30
会場：国立科学博物館日本館2階講堂



パネルディスカッションの様子

第一部 IPY2007-2008観測報告

—観測現場からの速報—

- ・ 2007-2008年南極トラバース観測
—日本隊とスウェーデン隊が見つないだ3000km— 杉山 慎（北海道大学低温科学研究所講師）

- ・ ペンギンから見た南極の海 國分互彦（総合研究大学院大学大学院学生）

第二部 これから50年の南極・北極観測への提言—中学生、高校生等から—

- ・ 井澤佑斗（早稲田大学高等学院3年）
50年後も美しくあるように
- ・ 柴沼貴司（埼玉県立本庄高等学校1年）
50年後の南極
- ・ 小野 優（筑波大学1年）南極と私たちをつなぐもの～アンケートの結果から～
- ・ 山崎史子（長崎県立島原高等学校2年）
アイソスタシーについて
- ・ 大島知幸（群馬県立前橋高等学校1年）

Act Polar, Act Global, Think Cosmic
～地球の未来のために北極・南極ができること～

第三部 パネルディスカッション—50年前、現在そして50年後の南極・北極観測—

パネリスト：第一部講演者、第二部提言者、鈴木正美（埼玉県本庄市立本庄西中学校教諭）、富田尚道（群馬県前橋市立前橋第四中学校教諭）、北村泰一（九州大学名誉教授/第1次南極地域観測越冬隊隊員）

当日は123名（講演者やスタッフを含む）の参加を得て、盛会であった。熱気を帯びた提案・討議の詳細については別途報告するが、生徒諸氏の正々堂々とした発言態度や新鮮な発言内容に、「日本の極域研究の将来は安泰である」と感じたのは、筆者だけではないと思う。

Work Shop

南極条約締結50周年記念 協議国会議報告

4月6～17日にかけて、米国ワシントンDCおよびボルチモア市で第32回南極条約協議国会議が開催された。我が国から橋本副大臣（閣僚級会合のみ）をはじめ外務省の小田審議官、水野地球環境課長を団長に、水産庁伊佐調査官、環境省環境保全対策課、および文部科学省（国立極地研究所：藤井所長、国際企画室から山内室長と渡邊）等、延べ11名が出席した。今回特別にホスト国の米国が北極評議会に呼びかけて、会合初日にワシントンDCで閣僚級合同会合が開催され、南極条約50周年、および国際極年2007-2008と極地の科学に関する閣僚政治宣言が満場一致で採択された。橋本副大臣は、南極条約体制の将来にわたる我が国の協力の継続を確認し、北極評議会へのオブザーバー参加に対する我が国の関心を表明した。

数年来協議が続けられた環境保護議定書附属書Ⅱ（動植物相の保存）の改正案がまとめられ、無脊椎動物が保護対象へ追加された。南極観光に関して500人以上の客船からの上陸を禁止する等規制を強化したほか、南極での生物探査について次回会合までのあいだ電子フォーラムで意見交換を進めることになった。また本年9月に任期満了する事務局長の選挙が行わ

れ、アルフレッド・ウェーゲナー極地海洋研究所のラインケ博士が選出された。次回会合は2010年5月3～14日の間、ウルグアイで開催される。

（渡邊研太郎：国際企画室・教授）

2009年北極科学サミット 週間会議報告

2009年の北極科学サミット週間（ASSW）中の諸会議が3月22～28日まで、ノルウェーのベルゲン市で開催された。322名の参加があり、日本からは13名であった。国立極地研究所からは神田、伊藤准教授、東准教授が参加した。ASSW会期中に国際北極科学委員会（IASC）オープンフォーラム、IASC評議会が開催された。他に北極オペレーターフォーラム（FARO）、太平洋北極グループ会議（PAG）、ニーオルスン管理者会議（NySMAC）、北極海洋科学委員会（AOSB）が開催され、参加した。24～26日の3日間、ASSW 2009 科学シンポジウムがASSWの10周年を記念して開催された。近年の海水変動に関する研究は参加者の関心を集めた。次回のシンポジウムは2011年、韓国の予定である。

IASC評議会で決定された新組織では評議会に各国2名の代表をおき、かつ新設される科学常置委員会（Terrestrial,

Cryosphere, AOSB/Marine, Social & Human, Atmosphere）にも各国から2名の代表を派遣することになった。次期のASSW開催は2010年4月13～16日、グリーンランドのヌークの予定。

（神田啓史：北極観測センター長・教授）

ユネスコ —北極の持続的発展に関する 専門家会合（モナコ）

地球環境に強い関心をもつモナコ公国アルバート2世公のスポンサーにより、2009年3月3～6日、モナコにて開催された。今、地球温暖化の中で北極は激しい変化に見舞われている。単なる気温の上昇にとどまらず、海氷域の急減、氷河の後退、永久凍土の融解と、様々な変化が起っている。こういう中で、北極は今後どうしていったら良いか、それをUNESCO（国連教育科学文化機関）の立場で考えることであった。

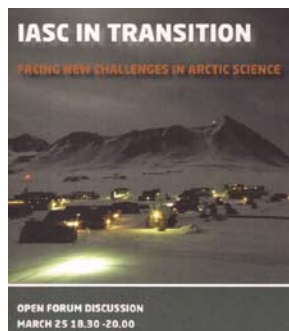
北極のサイエンスを進める立場からは、長期モニタリング観測の重要性を指摘した。即ち、国際極年（IPY）2007-2008などで進められた、環北極の観測ネットワークを維持し、変動を捉え、モデルを通じた将来予測に役立てていくことである。

もう一つが、北極域に住む「人々」（Indigenous People = 原住民、土着の人々）との関わりである。これは、我々日本では余り意識してこなかったことだが、今般のIPYの大きな特徴でもあったし、北極評議会（Arctic Council）の中心テーマの一つでもある。北極変動の人々への影響が大きな問題であり、さらには、彼らの知識・知恵を研究に生かし、共に担う仲間として一緒に研究を進めるべき、と位置づけられた。南極とは極めて異なる枠組みができてきていることを感じた。

（山内 恭：気水圏研究グループ・教授）



第32回南極条約協議国会議の環境保護委員会
日本代表団席側から。



国際北極科学委員会オープンフォーラム
で配られた新組織を紹介する小冊子



昭和基地から

1月 上旬は周期的に低気圧が通過したために曇天や雪の日が多く、日照時間も少なかった。中旬は気温が高く、穏やかな晴天の日が多かったが、下旬には1月としては10年ぶりのブリザードとなり、最大瞬間風速41.2m/sを記録した。新隊が未だ昭和基地入りしていなかった正月は、第49次隊のみで迎えるという近年では稀なケースとなった。13日午後オーロラオーソトラリス(AA)号から第一便のヘリコプターが飛来し、生鮮食料品や託送品が届けられると、基地内はひときわ賑やかとなった。空輸を皮切りに第50次夏期オペレーションが本格的に開始された。月末にかけて低気圧が基地西方で停滞したために天候不良が続く、フライトオペレーションは待機、順延を繰り返した。1月29日午前に第49次、50次隊の越冬交代式を行い、基地の観測業務と施設・設備の管理運営が引き継がれた。

2月 越冬交代後も天候不良のため、AA号関係者を含む両観測隊が基地に留まることとなったが、2日には第50次越冬隊を残し、全員がAA号に乗船、直ちに北上を開始し帰路についた。

中旬後半から下旬にかけて曇りや雪の日が多く、10日には第50次越冬隊初の外出注意令が発令された。20～21日にかけては暴風雪となりA級ブリザードが記録され、越冬隊初の外出禁止令が発令され

た。特に20日には最大風速47.4m/s(観測史上1位)、最大瞬間風速54.3m/s(2月としては観測史上1位)を記録した。各観測、設営部門とも順調に越冬業務を開始した。

3月 上旬から中旬にかけては低気圧が接近する日が多く、曇天の日が続き、吹雪を伴う日も多かった。下旬前半は、高気圧に覆われ晴れる日が多くなったが、後半は基地北の低圧部の影響により曇りの日が多くなった。この月は4回のブリザードに見舞われ、うち3回がA級となった。野外行動も活発になり、野外安全行動訓練や海水安全講習、基地周辺のルート工作などが行われた他、消火訓練体制の見直し、建物の安全点検などが行われた。越冬開始より1ヶ月が過ぎ、生活に慣れてきたこともあり、観測作業、設営作業ともに順調に経過した。

第51次南極地域観測隊の冬期総合訓練を実施

3月2～6日までの5日間にわたり、長野県松本市安曇の乗鞍高原において、第51次南極地域観測隊員候補者を対象とした、冬期総合訓練を実施した。

この訓練は、南極に関する知識と情報を隊員候補者に伝えることと、南極での行動と安全に関する理解を深めることを目的として行われ、本吉第51次観測隊長をはじめ、工藤越冬隊長、隊員候補者、講師、防衛省関係者並びに国立極地研究



集合写真(鈴蘭小屋前にて)

所関係者ら88名が参加した。

また、外国からアジアの極域科学に関する相互交流の一環として中国2名、韓国1名の参加があった。

訓練初日には、南極地域観測統合推進本部を代表して、文部科学省海洋地球課の丸山課長補佐から、第51次隊への期待と参加者への激励の言葉があった。

講義の他、野外訓練では、コンパスを使ってのルート工作訓練、ビバーク訓練(簡易テントによる緊急露営)、負傷者の搬送訓練及びロープワーク訓練などを行った。野外での観測活動が主となる隊員候補者等13名は、乗鞍岳中腹へ向かい、より厳しい環境で、ビバーク訓練等を行った。訓練中は、天候にも恵まれ、全日程を無事終了することができ実りある訓練となった。

極地研カレンダー

4月8日	観測隊帰国報告会・歓迎会 (明治記念館)
4月9日	総研大入学式
5月1日	立川移転完了
5月2日	立川移転記念講演会 (立川市市民会館アミューたちかわ)
5月20日	新南極観測船「しらせ」引き渡し
5月27日	運営会議
6月3日～4日	南極隕石シンポジウム
6月5日	南極設営シンポジウム
6月19日	南極本部総会
6月22日～26日	第51次観測隊夏期総合訓練(草津)

昭和基地 月別気象状況	2009年		
	1月	2月	3月
平均気温(℃)	-1.2	-2.9	-6.0
最高気温(℃)	4.0(28日)	3.2(5日)	-0.2(4日)
最低気温(℃)	-8.9(7日)	-10.8(18日)	-18.0(24日)
平均気圧・海面(hpa)	983.3	982.1	982.3
平均蒸気圧(hpa)	4.1	3.7	3.0
平均相対湿度(%)	73	73	73
平均風速(m/s)	6.1	6.8	8.6
最大風速・10分間平均(m/s)	34.1(27日)	47.4(20日)	36.7(8日)
最大瞬間風速(m/s)	41.2(27日)	54.3(20日)	43.3(8日)
平均雲量	7.9	7.6	8.1

Information

人事異動

●平成21年3月31日付け

【定年退職】

長坂悦朗 (事業部企画課長)

【任期満了退職】

笠松伸江 (研究教育系助教)

【転出】

宮下貴志 理化学研究所知的財産戦略センター知的財産戦略グループマネージャー (事業部長)

植木祐輔 東京大学先端科学技術研究センター企画調整チーム 専門員 (管理部総務課専門員)

●平成21年4月1日付け

【採用・転入】

中村卓司 研究教育系教授(京都大学生存圏研究所准教授)

江尻 省 研究教育系助教(日本学術振興会特別研究員)

菅沼悠介 研究教育系助教(日本学術振興会特別研究員)

岡本拓也 南極観測センター副センター長(事業担当) (理化学研究所横浜研究所研究推進部次長)

川久保 守 広報室長(特任専門員)(新潟大学研究支援部国際課長)

成田綾子 管理部総務課総務係(東北大学病院経理課)

【任用更新】

青山雄一 研究教育系助教

内田雅己 研究教育系助教

【配置換え】

石沢賢二 南極観測センター設營業務担当マネージャー(事業部極地設営室長)

【昇任】

大塚英明 南極観測センター企画業務担当マネージャー(事業部企画課課長補佐)

江連靖幸 管理部会計課課長補佐(管理部会計課専門職員)

【再雇用】

長坂悦朗 極地情報系極地データセンター事務職員(係員)(事業部企画課長)

【兼務免】

神山孝吉 研究教育系教授(極域観測系南極観測推進センター長)

【兼務命】

白石和行 南極観測センター長(研究教育系教授)

神山孝吉 南極観測センター副センター長(観測担当)(研究教育系教授)

山岸久雄 研究教育系宇宙空間研究グループ長(研究教育系教授)

和田 誠 研究教育系気水圏研究グループ長(研究教育系教授)

澁谷和雄 研究教育系地圏研究グループ長(研究教育系教授)

小達恒夫 研究教育系生物圏研究グループ長(研究教育系教授)

佐藤夏雄 研究教育系極地工学研究グループ長(研究教育系教授)

本山秀明 研究教育系先進プロジェクト研究グループ長(研究教育系教授)

近刊紹介

南極資料 Vol. 53 No.1には研究ノートとして、森本らの連続フロー式質量分析計を用いた大気中メタンの炭素同位体比の高精度測定、報告として、渡邊の第41次南極地域観測隊越冬報告2000-2001、伊村の第49次南極地域観測隊夏期行動報告2007-2008、森本らの小型クライオサンプラーを用いた昭和基地での成層圏大気採取実験：第49次隊実験報告、Khare N.のニーオルズンを基地にしたインドの北極観測(英文)、工藤らの東南極宗谷海岸ラングホブデ域にある「氷河池(仮称)」の多年性雪堤防決壊：決壊に伴った擾乱による湖沼内とその周辺植生への影響に関する考察(英文)の6編を掲載している。

広報室から

盛況に行われた立川移転記念講演会

5月2日、立川市市民会館にて「立川に南極がやってくる」を開催。日本科学未来館・館長の毛利衛氏による「宇宙と南極から見た地球環境」には聴衆の熱い関心が寄せられ、また昭和基地とのライブ交信では子どもたちの楽しい質問に会場が笑いの渦に包まれていた。国立極地研究所の今後が立川市民に期待される一日だった。



講演会前のロビー展示の様子

総合研究大学院大学・極域科学専攻コーナー

2月27日の研究科教授会において、3名の学生への学位授与が認められた。

吉田明夫：博士(学術)「地磁気活動の季節変化と長期変化」、國分互彦：博士(理学)「南極半島域におけるペンギン2種の採餌戦略に関する研究」、田邊優貴子：博士(理学)「南極湖沼における藻類群集の光生理・生態学的研究」。

そして、3月24日、葉山キャンパスにおいて学位記授与式が行われた。なお、田邊さんが総合研究大学院大学研究賞を受賞した。

一方、博士と同様の手続き(審査会主査による内容説明後、教授会メンバーによる投票)を経て、極域科学専攻を退学する2名の学生に対して修士号の授与が認められた。豊永雅美：修士(理学)「多周波イメージングリオメータを用いた高エネルギー降下粒子の検出方法に関する研究」、西村八代：修士(理学)「オゾンゾンデ観測データを用いた極域の対流圏界面の研究」。



入学式の様子

4月9日、葉山キャンパスにおいて総研大入学式が行われた。入学者は博士後期1名(地圏)、5年一貫制3名(地圏1名、生物2名)の計4名であった。

(澁谷和雄：専攻長)